

上田ロケ映画 AWARD 2021 決まる！

上田ロケ映画紹介 (Vol. 2)

上原 昇 (2組)

▼ 上田ロケ映画 10 作紹介 (後篇)

- 05) 「男はつらいよ 寅次郎純情詩集」(1976年、監督：山田洋次、主キャスト：渥美清、京マチ子、倍賞千恵子、主ロケ場所：前山寺、別所温泉、配給：松竹)
人気シリーズ 18 作目。毎回全国各地を歩くフーテンの寅さん、本作では、信州の鎌倉“別所”が舞台で、上田別所線の丸窓電車なども登場する。
マドンナ役の京マチ子は、一昨年 95 歳で鬼籍に入っている。
次に紹介する「たそがれ清兵衛」も上田でロケをしていることから、山田監督は信州上田が気に入っているのだろう。
山田は 89 歳になった今でも現役監督で、今年の 8 月 6 日には新作「キネマの神様」が公開予定である。ただし、この作品は上田と関係ない。

- 06) 「たそがれ清兵衛」(2002年、監督：山田洋次、主キャスト：真田広之、宮沢りえ、主ロケ場所：矢出沢川河畔、配給：松竹)
藤沢周平の原作で、山田洋次にとって初の時代劇。02年の邦画ベスト1である。
上田でロケした場面のことは全く知らずに見ていたが、その後帰省時にロケ場所(上田市常磐城)を訪ねてみると、意外と狭い所で撮っている。当該地の堀の内側は、故丸山瑛一さん(51期、元関東同窓会会長)の実家で丸山邸(木屋平)として有名。主役の真田は静かな中にも力の漲った演技をみせていたが、最近見た洋画「モータルコンバット」でも、61歳とは思えない忍者の殺陣をみせている。

▼ 関東同窓会で「サマーウォーズ」上映会開催

- 07) 「サマーウォーズ」(2009年、監督：細田守、配給：ワーナーブラザーズ)
本作は細田監督によるアニメーション作品で、全編、上田が舞台となっている。
映画の中で、母校校歌にある「試百難」と書かれた扁額が出てくるのには驚いた。
関東同窓会では、2010年4月に細田監督を招いて特別上映会を開催した。
当日は千代田区の一ツ橋ホールに、同窓生とその家族、友人など 300 名以上が参集して映画を楽しんだ。筆者は当時、同窓会役員をしており、上映後、細田監督とのトークショー司会を務めた。細田監督は富山県出身だが、奥様が上田染谷ヶ丘高校卒で上田とは縁が深いと言っていた。こちらの質問にもフランクに答えてくれ、とても感じの良い人だった。(写真)
その時の様子は会報 80 号に紹介、同窓会 HP でみることができる。

上映会での細田守監督



写真右の看板は当日一ツ橋ホール前に掲示、
故寺島知恵子さん（58期）の筆によるもの

- 08) 「ヴィヨンの妻～桜桃とタンポポ～」（2009年、監督：根岸吉太郎、主キャスト：松たか子、浅野忠信、主ロケ場所：上田蚕種、配給：東宝、09年邦画ベスト2）
太宰治の小説を原作して、話は上田とは関係ない。タイトルのヴィヨンとは、15世紀フランス、放蕩無頼詩人のF. ヴィヨンを主人公にダブらせている。
ロケ地の一つに上田蚕種(株)（現上田蚕種協業組合、上田市常田）の事務棟が警察署として登場する。この棟は大正時代のクラシックな建物（国登録有形文化財）で、他にも多くの映画に使われている。筆者の実家と同じエリアにあるだけに、子供の頃から馴染みがある懐かしい風景だ。



上田蚕種協業組合事務棟

▼「くじらのまち」上映会で同窓生監督を応援

- 09) 「くじらのまち」（2012年、監督：鶴岡慧子、主ロケ場所：別所線、菅平）

鶴岡さんは同窓生（105期）で菅平高原の出身、2012年第34回ぴあフィルムフェスティバル（PFF）で「くじらのまち」がグランプリ受賞。

関東同窓会では、2014年4月、鶴岡さんの応援を兼ねて上映会を開催し、約70名が日本教育会館に集まった。

上映後、筆者が鶴岡さんとのトークショーの司会をした。（会報88号に掲載）

鶴岡さんは、その後の監督作「過ぐる日のやまねこ」（2015年）でも、上田の各地でロケをしている。若手女性監督の鶴岡さんの今後の活躍に期待したい。

上映会トークショーでの鶴岡さん（左）と筆者



- 10) 「うさぎ追いし - 山極勝三郎物語」（2016年、監督：近藤明男、主キャスト：遠藤憲一、豊原功補、主ロケ場所：信大繊維学部講堂、配給：新日本映画社）ノーベル賞を惜しくも逃した山極博士は上田高校前身の上田変則中学の出身。本作をプロデュースした永井正人さん（62期）には関東同窓会総会で映画製作の裏話をしてもらった。（会報93号で紹介）

信大繊維学部講堂での場面には、エキストラとして駆り出された上田在住の同期（Y君やM君）が出演しているのを見て、思わずニヤツとしてしまった。

山極博士役の遠藤憲一が、どうしてもノーベル賞候補の学者には見えなかったのは筆者だけか。

▼ おわりに

以上紹介した作品のほかにも、「姿三四郎」（黒澤明監督、1943年）、「珈琲時光」（杵・ジャポエ、04年）、「博士の愛した数式」（小泉堯史、06年）、「ラストゲーム 最後の早慶戦」（神山征二郎、08年）、「青天の霹靂」（劇団ひとり、14年）など記憶に残る作品がありますが、このくらいにしておきます。ここまでお付き合いいただき有難うございました。

（2021年6月22日記）

以上